

## 失われた日本の風景

表題と写真は[都市懐旧]という、2000年初版刊行の写真集である。写真は菌部澄、文は神崎宣武。なんとも懐かしい写真が多い。「菌部澄の軌跡」の最後から。

菌部さんが被写体とする風景は、ただ視覚的に美しいというものではない。人が自然を愛しみ、歴史を通じて手を加えながら共存する、そうした風景を菌部さんは好んで被写体としてきた。戦後、とくに昭和30年代から40年代にかけての風景はめまぐるしくかわっていった。

その変化と新旧の共存を、菌部さんは写真にみごとに切りとっている。たとえば、東京の下町には長屋や路地など長く戦前の風景が残った。人情、人づきあいも残った。路地で遊ぶ子どもたちの表彰は無邪気に明るかった。それに対して、新宿、渋谷などの都心部では、ビルが建ち、道は舗装され、馬車に代わって車の姿が目立つようになった。だが、それでもビルの手前にバラック小屋が立ち並ぶ、あるいは駅前に肥桶が積んである、というように、そこにも土着の暮らしがあった。

菌部さんの写真からは、そうした都会の息吹が伝わってくるのである。においや音がそこはかたく感じられるのではないか。それは、まさに都会に生まれ育ち、都会に深い郷愁を抱く菌部さんだからこそ撮り得た風景であった、と思えるのである。

表紙の写真は、東京都北区王子付近、昭和27年5月13日。この写真から、子どもの頃の風景がよみがえってくる。幼少を過ごした名古屋の千種でも、大きな土管のようなものがあり、そこで遊んだ記憶が、「どかーん」とではなく微かにのこる。

次の写真は宮城県石巻市の繁華街(昭和33年4月)。石巻には震災後、何回か訪ね繁華街にも行ったが、様相は一変していた。震災前から、昔のようなまちの賑わいはなかったようだ。

その下の写真は愛知県一宮市、昭和30年とある。「駅とみちまちとむらのつながり」のなかに掲載。一宮駅近くなのだろうか。つい最近、一宮駅あたりを歩いた。きれいになった駅ビル前の通りに、あまり人は歩いていなかった。「都市懐旧」である。



(2016年10月26日)